

# 保育園児における母子の「スキンシップ」と 仲間入り行動との関係<sup>1)</sup>

富原 一哉・坂野はつみ<sup>2)</sup>

ヒトは晩熟性の動物であり、子は非常に未熟な状態で出生する。したがって、子の生存にはそれを保護し、養育を行う保育者が必須となる。生後6, 7カ月の乳児はその保育者に対して特別の情緒的結びつきを形成し、その養育者がいないと不安の兆候を示し、泣き叫ぶようになる。いいかえると、このころ赤ん坊は人見知りを始め、母親がいないと泣き叫び、他の人がどんなにあやそうとも泣きやまないことがよくある。このような特別の情緒的結びつきを Bowlby (1969) は愛着 (attachment) と名付けた。

この愛着の形成には、保育者と子の身体的接触が欠かせないと考えられている。Harlow & Mears (1979) は、出生間もないアカゲザルの子を群から隔離し、布製と針金製の2種の代理母親の下で養育した場合、どちらから授乳されるかに関係なく、子は肌触りのよい布製母親と過ごす時間の長いことを報告している。この事実は、授乳などによる欲求の充足から二次的に愛着が派生したのではなく、保育者との相互作用を生得的に希求する傾向性をヒトを含めた霊長類の子どもが進化的に獲得してきたことを表す1つの証拠と考えられている。

このような母子間の直接的身体的接触は、日常生活の中では「スキンシップ」と表されることが多い。そして、母子関係の形成にこの「スキンシップ」が重要であることは、常識的に受け入れられているようである。ところで、実はこの「スキンシップ」という言葉は和製英語であり、通俗的に用いられているだけで、心理学の中ではあまり明確に定義されていない。そこで佐野・荻野・鈴木 (1994) は、実際に母親が「スキンシップ」をどのように考えているかを明らかとする目的で調査を行い、母親は「母乳を飲ませる」「おんぶする」など

の直接的な身体的接触を示す項目だけでなく、むしろ「話しかける」「視線を合わせる」などの心理的な接触を強く「スキンシップ」と考えていることを明らかにした。たしかに、「スキンシップ」の母子関係の形成に果たす役割を考えた場合には、直接的な身体的接触という現象面だけでなく、その根底にある心理的な相互作用の方が重視されるべきであろうから、この母親の「スキンシップ」に対する認識は合理的であると考えられる。

さて、子どもは3歳頃になると母親から離れて仲間同士の社会関係を形成するようになる。この仲間関係の形成にも、それまでの母子関係が影響するといわれている。Bowlby (1973) の理論によれば、子どもは成育初期の愛着関係を、後の対人関係の作業モデルとして内在化させる。したがって、母子間に安定した愛着が形成された子どもは、そこから離れて仲間集団を形成する場合にも、安定した関係を築くことができると考えられる。実際、Waters, Wipman & Sroufe (1979) は、1歳半の段階で母親に対して安定した愛着を形成した子どもは、3歳半の時点で仲間集団のリーダーとなる傾向の強いことを報告している。

ところで、この時期の子どもはどのようにして仲間集団に参入しているのだろうか。Corsaro (1979) は、2～3歳児、および3～4歳児の自由遊び場面を観察し、子どもたちが行っている遊びに別の子どもが加わろうとする82のエピソードを分析した。その結果、子どもたちが仲間に加わるために使用した方略は、「仲間入りすることに対して言葉で許可を求める」「遊びが進行中の場所や使用しているものを言葉で要求する」「進行中の行動について質問する」「遊び参加者に遊具などのものを提供する」などであり、なかでも特に成功した行動方略は「進行中の遊びと同様の活動を自分でも始める」ことであることが示された。また、倉持・柴坂 (1999) は、2年保育の幼稚園児を入園から卒園まで継続的に観察し、学期が進行するにしたがって、仲間入りの際に「入れて」などと明確に仲間入りの意志を言語化する“明瞭な方略”の割合が増加すること、さらには仲間入りの成功率も増大することを報告している。

このように、社会化の始まりである3歳頃の幼児が実際に仲間集団へ参入す

る際には、実に様々な方略がとられており、またその方略は発達的に変化すると考えられる。当然、先に述べた母子関係、特に母子「スキンシップ」は、子どもにとっての社会化の実際的場面である仲間入りの際の行動方略にも影響を与えると予測される。そこで、本研究では、3歳以降の幼児における母子「スキンシップ」と子どもの仲間入り行動との関係を検討することを目的として、保育園において母子スキンシップの質問紙調査および子どもの仲間入り行動の観察を行うこととした。

ところで、幼児の仲間入り行動を検討したこれまでの研究の多くは、部外者である観察者が一定期間あるいは定期的に保育園などに訪れ、ビデオなどで撮影を行うという手法を採用している。このような非日常的な侵入者の存在は、観察対象に観察されることを意識させることによって、その行動に影響を及ぼす可能性がある（中澤，1997）。特に、幼児は対人的好奇心が強く、その影響は大きいと考えた方が適切であろう。そこで、本研究では、観察者自身が保育園の保育業務者として自然に集団の中へとけ込み、その上で対象となる行動データを収集する参加観察法を用いることとした。

## 方 法

対象：鹿児島市のH保育園に通う、3・4歳児、5歳児、及び6歳児クラスの園児とその母親を対象とした。各クラスの人数は3・4歳児クラス男児9名、女児8名の計17名、5歳児クラス男児7名、女児13名の計20名、6歳児クラス男児9名、女児1名の計10名であった。母親の平均年齢は33.9歳であった。

母子「スキンシップ」に関する調査：各園児と母親の「スキンシップ」の程度を測定するため、園児の母親に対して質問紙調査を行った。質問紙は、佐野ら（1994）の用いた母子の「スキンシップ」を評定する尺度項目もとに、著者が若干の項目を付け加えて作成した（Table 1）。この質問紙は、「生活の世話を目的とする育児行動（10項目）」、「子どもの身体運動を主とする育児行動（3項目）」、「心的接触を主とする育児行動（4項目）」、「身体的接触を主とする育

Table 1. 母子「スキンシップ」調査で用いた質問項目と園児の各年齢別での各平均下位尺度得点の中央値

下位尺度	質問項目	平均得点		
		3歳児 (n=9)	4歳児 (n=6)	5-6歳児 (n=24)
生活の世話を目的とする 育児行動	おむつをとりかえる ミルクを飲ませる 離乳食を食べさせる 入浴をさせる ねまきを着せる 歯みがきや耳そうじをする 顔を洗ってあげる 一緒に買い物に行く 保育園まで送り迎えする 運動会などの行事に参加する	4.70	4.00	4.45
子どもの身体運動を主と する育児行動	いないいないばあをする たかいたかいをする 一緒にテレビを見る 日光浴をさせる	3.75	3.13	3.63
心的接触を主とする育児 行動	話しかけをする 歌を歌ってあげる 子どもと視線を合わせる 子どもを見つめる	4.50	4.00	4.50
身体的接触を主とする育 児行動	添い寝をする 頬ずりをする おんぶをする 手をつなぐ 抱っこする	4.60	4.00	4.20
子どもの知的働きを促す 育児行動	散歩に出かける 本を読んでやる 一緒に玩具で遊ぶ	3.67	3.33	3.50
除外された項目	髪の毛をとく 母乳を飲ませる			

児行動（5項目）」、「子どもの知的働きを促す育児行動（3項目）」の5つの下位尺度からなり、尺度得点が高いほどその行動を行う傾向が高いことを示す。調査対象者である母親には、それぞれの質問項目に対して1)全くやらない、

2)あまりやらない, 3)やることもあり, やらないこともある, 4)比較的よくやる, 5)いつもやる, の5段階で評定してもらった。その他, 母親の年齢や職務形態, 一週間の平均勤務時間, 子どもの名前, 年齢, 性別, 入園時の年齢なども回答してもらった。質問紙は2000年11月初旬に47人の母親に配布し, 11月中に随時回収した。有効回収数は39 (83.0%) であった。

**仲間入り行動の観察:** 2000年11月1日から11月30日までの1ヶ月間, 1名の観察者が通常の保育業務者と同じ勤務形態で鹿児島市内のH保育園に通い, 園の活動に参加する中で対象児の行動を観察した。観察者の入園に際しては, 園児に対しては「保母さんのお勉強をしているお姉さん」と紹介され, 母親に対しては「卒論のデータ収集のため保育園を手伝いながら勉強している」ことが説明された。なお, 先述の母子「スキンシップ」の調査において有効な質問紙を回収できたかどうかに関わらず, 3歳児クラス以上の子ども全員を観察の対象とした。観察は午前中の自由時間, 昼食後の自由時間, 帰宅前の自由時間に, 園児たちの遊び相手や世話をしながら行った。子どもたちが遊んでいるときに, 別の子どもがその遊びに参加しようと試みることを「仲間入り」行動と見なし, 参加する側の子どもが示した「仲間入り方略」(Table 2)と, 参加される側の子どもがそれに対して示した反応 (Table 3) をチェックリスト法により記録した。これらの項目は, Corsaro (1979) のものを一部改変して用いた。また, 子どもたちが何をしているかはっきりしていなくても, 別の子どもがその集団の輪に入っていこうとした場合は「仲間入り」と判断した。なお, 複数の子どもが同時に仲間入り行動をおこした場合は, それらをまとめて1つのエピソードとして記録した。1つのエピソードで複数の仲間入り行動や受け入れ側の反応が連続して生じたときには, それら全てを記録した。記録用紙には仲間入り行動のほかに仲間入り側, 受け入れ側それぞれの名前や仲間入りが行われた時刻, その時行われていた遊びの種類も記録した。観察中は常に記録用紙をエプロンのポケットに入れておき, 実際の記録用紙への記入は観察後に園児たちに気づかれないように行った。

Table 2. 仲間入り行動方略とその生起頻度及び成功頻度（方略成功率%）

行動方略	内容	生起頻度	成功頻度	
近づく(言葉あり)	言葉をかけないで近づく	12	7	( 58.3)
近づく(言葉なし)	話しかけながら近づく (他の項目と異なっている場合のみ記録)	12	4	( 33.3)
行動をまねる	遊び参加者が進行中の行動と似た行動をする	12	6	( 50.0)
物を邪魔する	進行中の行動を物理的に邪魔する	3	1	( 33.3)
周囲を回る(言葉あり)	言葉をかけながら遊び参加者の周りを回る	0	—	( — )
周囲を回る(言葉なし)	言葉をかけずに遊び参加者の周りを回る	1	1	(100.0)
場所や物の要求	遊びが進行中の場所や使用しているものを言葉で要求する	6	6	(100.0)
許可を求める	仲間入りすることに対して言葉で許可を求める	19	15	( 78.9)
質問する	進行中の行動について質問する	7	4	( 57.1)
大人に頼る	仲間入りしたいことを大人に伝えてその権力に頼る	0	—	( — )
物を提供する	遊び参加者に遊具などのものを提供する	2	0	( 0.0)
あいさつする	遊び参加者に言葉であいさつする	0	—	( — )
友情に訴える	遊び参加者に言葉で自分たちの友情を確認する	0	—	( — )
外からの援助	遊び参加者外から仲間入りするための援助を言葉で受ける	0	—	( — )
他の活動に誘う	遊び参加者をほかの活動に誘う	1	0	( 0.0)
遊びに誘われる	遊び参加者から遊びに入られることを誘われる	3	3	(100.0)
	合計	78	47	( 60.3)

Table 3. 仲間入り行動の受け入れ側の反応とその生起頻度

	受け入れ側の反応	内容	生起頻度
受け入れ	働きかけに応じて受け入れる	行動をまねるなどの言葉以外の働きかけに応じ、仲間に入れる	14
	話しかけに応じて受け入れる	話に応じているうちに仲間に入れている	33
	自ら誘って仲間に入れる	仲間に入ることを誘い、誘われたほうもそれに応じる	3
	大人の権威に応じて受け入れる	大人に仲間に入れることを要求され、受け入れる	0
拒否	無視する	言葉や行動で何も反応を示さない	16
	話しかけに応じるが受け入れない	話しかけに対して「だめ」「いや」などの言葉で仲間入りを拒否する	15
	移動する	それまでいた場所を移動して遊びを続ける	1
	遊びをやめる	それまでしていた遊びをやめる	0
	その他		0

## 結 果

### (1) 母子「スキンシップ」

母子「スキンシップ」質問紙の各項目に関して、I-T 相関を算出したところ、「髪の毛をとく」「母乳を飲ませる」の2項目に関しては統計的に有意とならなかったため、以降の分析ではこれらの項目を除外した。園児の各年齢別での平均下位尺度得点を Table 1 に示した。6 歳児の園児数が少ないことと、5-6 歳での発達的变化はそれ以下の年齢よりも比較的小さいと考えられる点を考慮して、5, 6 歳児はまとめて1つの群とした。各下位項目得点について Kruskal-Wallis の順位検定を行った結果、「生活の世話を目的とする育児行動」で有意差が認められ  $[H(2)=6.3, p<.05]$ 、3 歳児の得点が他の年齢児の得点よりも高いことが明らかとなった。また、統計的に有意ではないものの、「身体的接触を主とする育児行動」や「子どもの知的働きを促す育児行動」でも、3

歳児で最も得点が高かった。他の項目に関しては、年齢に応じた得点変化は明確ではなかった。

## (2) 仲間入り行動

1カ月の観察期間中に、58回の仲間入りエピソードが記録された。仲間入りされる側が行っていた遊びは、ブランコやボールなどの道具を使った遊び18回、ごっこ遊び15回、砂遊び13回、プロレスなどの道具を使わない身体遊び5回、その他7回であった。また、仲間入り行動を記録できた園児の数は33名（のべ72名）であった。この33名の園児については、最小1回から最大5回の仲間入り行動が繰り返して記録された。これら33名の園児について仲間入りの成功率（仲間入りが成功した回数／全仲間入り回数）を算出し、Kruskal-Wallisの順位検定によって園児の年齢で比較したところ有意差が認められ [H(2)=8.3,  $p<.05$ ]、5-6歳児は他の年齢児よりも仲間入りの成功率が高いことが明らかとなった (Table 4)。

Table 4. 各年齢の園児が示した仲間入り行動の成功率と有効方略使用率

年 齢	成 功 率 (%)	有効方略率 (%)
3 歳 (n=9)	43.75	51.04
4 歳 (n=6)	35.56	51.46
5 - 6 歳 (n=24)	57.78	57.47

仲間入りの際にとられた行動方略の頻度、その方略が成功した回数（及び方略成功率）を Table 2 に示した。園児が仲間入りの際に多く用いた方略は、「許可を求める」「近づく（言葉あり）」「近づく（言葉なし）」「行動をまねる」「質問をする」「場所やものを要求する」であった。このうち、「許可を求める」「近づく（言葉あり）」「質問をする」「場所やものを要求する」の4つの方略が採られたときに受け入れられる率が50%より高かったため、これらを「有効方略」と見なした。さらに、仲間入りを行った33名の園児に関し、それぞれの子どもが仲間入りの際にとった方略のうち、どの程度をこの「有効方略」が占め



ていたか、その割合（有効方略率）を算出した。成功率と同様、5－6歳児の有効方略率が他の年齢児の値を上回っていた（Table 4）が、この差は統計的に有意ではなかった。

仲間入り行動に対して受け入れ側の子どもたちがとった反応の頻度をTable 3に示した。各反応の生起回数は、「話しかけに応じて受け入れる」が最も多く、「無視する」「話しかけに応じるが受け入れない」「働きかけに応じて受け入れる」がほぼ同数でこれに続いた。受け入れ反応率は61.0%（50/82）であり、半数以上が仲間入りを受け入れる反応であった。

### (3) 母子「スキンシップ」と仲間入り行動の関係

母子「スキンシップ」と仲間入り行動の関係を検討するため、「スキンシップ」の各下位尺度得点と仲間入りの成功率、あるいは有効方略率との間でKendallの順位相関係数を求めた（Table 5）。その結果、「子どもの知的働きを促す育児行動」と有効方略率との間に有意な負の相関が認められた。したがって、「本を読んでやる」「一緒に玩具で遊ぶ」などの知的働きかけを多く行っているほど、逆に子どもは仲間入りの際に有効方略を示さないことが明らかとなった。また、統計的に有意ではないが、母子「スキンシップ」と成功率、あるいは有効方略率との間の相関係数は、ほとんど負の値をとることが示された。

また、有効方略率の高い園児と低い園児の母子「スキンシップ」特性を検討

Table 5. 母子「スキンシップ」得点と仲間入り行動の成功率及び有効方略率との順位相関

母子「スキンシップ」の下位尺度	成功率	有効方略率
生活の世話を目的とする育児行動	-0.105	0.028
子どもの身体運動を主とする育児行動	-0.031	-0.171
心的接触を主とする育児行動	-0.057	-0.125
身体的接触を主とする育児行動	-0.083	-0.037
子どもの知的働きを促す育児行動	-0.068	-0.229*

\*p<.05

するために、3回以上仲間入り行動を示した園児のみを選び出し、有効方略率が50%以下を有効方略低群、それより上を有効方略高群と分け、Mann-WhitneyのU検定を用いて、母子「スキンシップ」の各下位尺度得点を比較した（Table 6）。その結果、「生活の世話を目的とする育児行動」と「心的接触を主とする育児行動」の下位尺度で有意傾向があり [ $z=1.72$ ;  $z=1.71$ ,  $p<.10$ ], どちらの下位尺度でも有効方略低群の方が有効方略高群よりも「スキンシップ」得点が高い傾向が示された。

Table 6. 有効方略高群及び有効方略低群の母子「スキンシップ」の各下位尺度得点

母子「スキンシップ」の下位尺度	高群 (n=4)	低群 (n=6)
生活の世話を目的とする育児行動	4.20	4.70
子どもの身体運動を主とする育児行動	3.44	3.71
心的接触を主とする育児行動	4.00	4.83
身体的接触を主とする育児行動	3.60	4.43
子どもの知的働きを促す育児行動	3.42	4.28

## 考 察

本研究において、最も多く子どもたちが行った仲間入り方略は「入れて」などと明確に参加を求める言葉を発する「許可を求める」という行動であり、同時にその行動方略は成功率が高く非常に有効であった。逆に、Corsaro (1979) が指摘した「進行中の遊びと同様の活動を自分でも始める」という方略は、本研究の結果では必ずしも有効率が高くなかった。このような差が生じたのは、日本では仲間入りの際に「入れて」などと許可を求める言葉を発することがルーティン化されており、それが保育園などで積極的に教えられている（倉持・柴坂, 1999）ためであると考えられる。

母子「スキンシップ」の質問紙調査では、「生活の世話を目的とする育児行動」で3歳児の得点が他の年齢児の得点よりも高いことが示された。したがって、生活の世話を媒介とした母子の「スキンシップ」は、子どもの成長にとも

なって減少していくものと考えられる。また、他の下位尺度では有意差は示されなかったが、おそらく子どもの年齢が進むにしたがって、直接的な身体的接触を意味するような「スキンシップ」は他でも全般的に減少していくものと予測できるだろう。

「スキンシップ」得点とは逆に、仲間入りの成功率は子どもの年齢が上がるにつれて高まるという結果を示した。有意ではなかったが、有効方略率もほぼ同様の傾向があると見なしてよいだろう。したがって、子どもは年齢が進むにしたがって、「上手」に仲間入りができるようになると考えられる。つまり、母子「スキンシップ」と仲間入り行動の発達はちょうど trade off の関係にあると見なせるのである。

同様のことは、両者の関係の直接的分析からもうかがえる。「子どもの知的働きを促す育児行動」と有効方略率との間には有意な負の相関が認められ、母子「スキンシップ」と成功率、あるいは有効方略率との間の相関係数はほとんどが負の値をとった。さらに、いくつかの下位尺度においては、有効方略低群の方が有効方略高群よりも「スキンシップ」得点が高い傾向が認められた。したがって、適切に社会化している子どもでは、むしろ母子の「スキンシップ」は希薄化する傾向にあると考えられる。

これらの結果が示すように、この時期の子どもの社会化は、それまで母親にだけ向かっていた相互作用の指向性がそこから離れることを意味する。つまり、母子関係はそれまでの極端な密着型から適度な分離型へと変化するのである。この過程には、子の接触に対する母親側からの拒否が大きな影響を与え、それは多くの霊長類に共通すると考えられる。たとえば古川（1992）によると、カニクイザルの母子の身体接触は、ちょうど子ザル同士で遊び始める5週齢ぐらいから急激に減少を始め、7週齢ぐらいで一旦底となる。その後12-13週齢で再び身体接触の割合は増加するが、母親の子ザルに対する拒否行動も増加し、これにともなって再び身体接触は15週齢頃で減少することを報告している。またこの他にも多くの霊長類の種で、ちょうどこれに対応する時期に母親による子の罰といった子別れの儀式が起こることが知られている（see 根ヶ山, 1998）。

つまり、子の社会化は、母子分離の過程で、揺り戻しを行いながら成立していくのである。

しかしながら、この時期に母子分離を強引に進めれば子どもの社会化が促進されるとは、単純には考えられない。たとえば、Kaufman & Rosenblum (1969) は、同じマカク類のサルでも、母ザルから子ザルへの罰行動が多いブタオザルよりも、罰の少ないボンネットザルの方が独立時期が早いことを報告している。また、Harlow & Mears (1979) の代理母親の実験でも、罰に応じて逆に代理母親に対する抱きつき行動が増加することが示されている。

本研究でも、母子の「スキンシップ」と仲間入り行動には、それぞれ年齢に応じた発達変化が認められた。したがって、ここで示された両者の trade off は、決して因果関係を表すのではなく、あくまでも子どもの社会性の健全な発達にともなって並行的に出現する2つの側面と考えた方が適切であろう。

## 引用文献

- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, Vol. 1 Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 1976 母子関係の理論 I: 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss, Vol. 2 Separation*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 1977 母子関係の理論 II: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Corsaro, W. A. 1979 'We're friends, right?': Children's use of access rituals in a nursery school. *Language in Society*, 8, 315-336.
- 古川真弓 1992 触覚と社会的認知 岡野恒也編著 比較発達心理学 第6章第2節 ソフィア Pp. 200-208.
- Harlow, H. F. & Mears, C. 1979 *The human model: Primate perspectives*. Washington, DC: Winston. (梶田正巳他訳 1985 ヒューマン・モデル 黎明書房)
- Kaufman, I. C. & Rosenblum, L. A. 1969 The waning of the mother-infant bond in two species of macaque. In B. Foss (ed.) *Determinants of infant behaviour, Vol. 4* London: Methuen, Pp. 41-59.
- 倉持清美・柴坂寿子 1999 クラス集団における幼児間の認識と仲間入り行動 心理学研究, 70, 301-309.
- 中澤潤 1997 人間行動の理解と観察法 中澤潤・大野木裕明・南博文編著 心理学マ

ニユアル 観察法 序章 北大路書房 Pp. 1-12.

根ヶ山光一 1998 離乳と子の自立 糸魚川直祐・南徹弘共編 サルとヒトのエソロジー  
第11章 培風館 Pp. 134-147.

佐野良五郎・荻野七重・鈴木五三男 1994 母子交流に関する研究—スキップにつ  
いて— 小児保健研究, 53, 425-431.

Waters, E., Wipman, J., & Sroufe, L. A. 1979 Attachment, positive affect and competence in  
the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development*, 50, 821-829.

### 注

- 1) 本論文は第2著者の卒業論文(平成12年度)のデータを再分析したものである。また、本研究の実施にあたり、ご協力いただいた保育園の教職員の皆様、そして園児と保護者の皆様に心より感謝いたします。
- 2) 現在の所属 湧上印刷株式会社